

「主体的に学習する児童の育成」

地域の力を活かした対話的な学びをつくる学習活動の工夫

I 研究の内容

1 主題設定の理由

子どもたちは、これからの社会を生き抜くために、自立し、他者と協働しながら、新しい価値を創造する力を求められている。そのため、知識の質や量の改善とともに「どのように学ぶか」という学びの質や深まりが重視されている。さらに、社会の変化に目を向けて、教育が普遍的に目指す根幹を維持しつつ、社会の変化を受け止めていく「社会に開かれた教育課程」の編成が必要となっている。そのためには、子どもや地域の実態を踏まえて、地域の人・ものを活用し、地域社会と連携していくことが重要になる。

昨年度までの研究では、子どもたちが、基礎的知識・技能を習得し、自分が直面した課題を解決するための思考・判断・表現ができるように、各教科における言語活動の充実、特に算数科に焦点をあてて、社会集団の中で他者と関わり合いながら生活していくのに必要とされる表現力やコミュニケーション能力の育成を図るための研究を進めてきた。これまでの取組の中で、自分の考えを他者に伝えることを楽しみ、論理的に伝えることのできる力が向上してきている。また、学び合いの中では、自他の考えの相違点に気付いたり互いの考えのよさを認め合ったりすることができるようになってきている。高学年では、自力解決したことを意見交換したり話し合ったりしてお互いの思考をつなげることで、自分の考えをより深めるものとすることもできるようになってきている。しかし、小規模校であるので、学校内での交流できる人数は限られている。

本校では、来年度、学校運営協議会が設置され、コミュニティ・スクールとして、家庭や地域との一層の連携を深めた教育活動を進めていく。そこで、地域の力をコミュニケーション能力の育成にも活かしていきたい。交流の場を地域へと広げ、学校の外の人との交流を設定することが、児童の自己表現力と人間形成能力を高めることにとって有益であると考え、地域参画型授業の実践を積極的に行っていく。子ども同士の協働活動や地域の方々との対話等の活動を通して得た手がかりをもとに考え、意見を交流し合う。その中で、子どもたちは学ぶ意義を見つけ、学習に対する達成感を持ち、より主体的に学習に向かうようになるであろう。学校内外の方々との対話を通して「対話的な学び」をつくり、主体的に学ぶ児童の育成を目指したい。

さらに、甲州市「確かな学力」育成プロジェクトとも連携し、授業の構造化の定着とともに、「NRT」「Q-U」調査を活用して学力向上とともに、互いを認め、高め合う学級集団づくりにも焦点をあててきたい。

2 研究の具体的な内容と方法

(1) 研究内容

- ・地域の力を授業と学校行事に活用できる場面の開発をする。
- ・「対話的な学び」から学びを確かなもの、より深いものにするための授業展開を検討し、実践する。
- ・児童の変容を明確にするため、アンケートの作成をする。

(2) 研究方法

- ・「授業づくり部会」では、地域の力の活用や「対話」を通じた学びをつくる授業展開を研究し、2学期に授業研究を行う。
- ・「行事検討部会」では、学校行事を地域の力を活用したり、児童が学習したことを発信したりできる場にする行事の持ち方や運営方法を研修し、実践をする。
- ・甲州市「確かな学力」育成プロジェクトの3つの柱についての取組と連携を図る。

3 研究実践

(1) 研究授業 第4学年 社会科「昔から今へと続くまちづくり」

～ぶどう・ワインづくりの発展に尽くした先人の働き～

授業者 志村 克人教諭

指導・助言 義務教育課指導主事 植松 聖人先生

(2) 文化祭 平成29年10月31日(火) 13:45～15:45

学年ごと「CSに関わる発表」を行い、地域に自分たちの活動を発信する

1年生「たのしかったこといっぱい」生活科：いろやかたちたくさん見つけた

2年生「ひしやま たんけんたい」生活科：発見！町へとび出そう

3年生「ぶどう作り探検隊」社会科：調べよう物をつくる仕事

4年生「わたしたちのくらしを支えてくれている人たち」

社会科：安全なくらしとまちづくり

5年生「菱山の自然について考えよう」総合：菱山の地域について調べよう

6年生「平和な未来にするために」総合：平和・人権について考えよう

II 成果と課題

1 成果

- ・協働的な学習や地域等学校外の人との対話については、実践の中で様々な取組が実施された。学習活動を工夫し、対話的な学びを設けることで、自ら進んで学ぼうとする意欲が見られた。地域での体験や地域の人たちとの対話から、新たな知識や自分の考えを持ち、それを互いに認め合うことで、自分の考えを広げ深めている姿や、日々の学習指導の中で対話による学びの必要性を児童が感じながら学習している姿が見られた。本校は、少人数集団であるので、講師（学校支援ボランティア）を招き学習したことで、自分から話しかけるなど他者とのかかわり方についても学んでいくことが出来た。
- ・文化祭への取り組みを通し、地域の人から学ぶという意義やよさを児童が感じるとともに、学んだことを生かして大勢の前で発表したことで満足感と達成感を味わわせることができた。学んだことを発信する為に対話を活用していたので、学ぶ・伝えるというサイクルが出来た。
- ・文化祭での講師への配慮や掲示、各学年でのお礼の会や手紙などの取り組みは、講師として来ていただいた地域の方の自己有用感にもつながった。学校と地域の双方に得のある良好な関係を築くことが大切である。

2 課題

- ・児童同士の学び合いに加え、講師の先生や地域の人との対話をさらに深めていくにはどのような手立てが有効なのかなど、より深い学びに結びつけるための研究をさらに進めていく必要がある。
- ・今年度作成したCS単元構想は、講師との打ち合わせや対話的な学びをつくる学習活動の展開を図る上で有効だった。授業者が誰であっても簡潔で活用しやすい構想案づくりをさらにすすめていきたい

III 成果物

1 研究授業指導案

2 CS単元学習構想（各学年）

3 家庭学習に関するアンケート等の資料

（研究主任 武井麻子）